

日本山岳会 越後支部報

第 16 号

平成28年6月25日
発行 日本山岳会越後支部
発行者 遠藤家之進正和
新潟県新潟市南区鷺ノ木新田1049
TEL・FAX 025-362-5004
広報委員長 本間 一人



私の一枚

「浅草岳」

越後支部創立70周年記念事業として、日本三百名山越後支部担当21座全山登頂計画が、3月27日浅草岳(1585.5m)からスタートした。参加者8名全員が登頂し、JAC&越後支部旗を掲げた記念写真である。

桐生 恒治

公益社団法人日本山岳会越後支部七十周年記念二十一座登山報告書

二〇一六年三月三十日

報告者 桐生 恒治

- 一 山域・山名・魚沼市・浅草岳(一五八五・五m)
- 二 山行日…二〇一六年三月二十七日(日)
- 三 参加者…C L桐生恒治、松井潤次、和田守、石山政雄、遠藤俊一、後藤正弘、田邊信行、東原進(以上八名)

なお、SL成海修は腰痛のため不参加、遠藤支部長は見送りに参加した。

四 コースタイム

- 旧大自然館駐車場6…40↓7…30林道終点↓8…30稜線取付(一〇〇〇m)付近↓10…30カヘヨノボッチ(一四八五m)↓10…45前岳↓11…00浅草岳山頂12…00↓13…00稜線取付(一〇〇〇m)付近↓14…00旧大自然館駐車場↓16…30解散
- 五 行動概要

音松荘前泊組(田邊、石山、遠藤、後藤、東原、桐生)と現地集合組(松井、和田)とも、午前六時過ぎに旧大自然館駐車場で合流した。旧大自然館まで道路除雪がされており、残雪は一m以上で背丈ほどであったが例年の半分程度とのこと。出発準備を整えてから、見送りに来ていただいた遠藤支部長から「二十一座登山の最初の登山であり、安全に気を付け、ぜひ成功させてください。」と激励の挨拶があった。幸い天候は快晴無風状態で、絶好の春山登山日和である。登高手段は、ツボ足組五名(松井、和田、田邊、石山、遠藤)とスキー組三名(後藤、東原、桐生)である。

昨夜の冷え込みで雪面は硬くクラストしており、ツボ足組はスノシューやワッパは全く不要で快適に歩き始める。ハイペースで好調に飛ばすツボ足組に比べ、山スキー組は逆に硬い雪面のため、急斜面になるとスリップして遅れ気味である。それでも林道が続く間は快適に登るが、稜線取付

(一〇〇〇m) 下部の樹林帯急斜面では、ツボ足組は順調に高度を稼ぐが、山スキー組はジグザク登行やスリップ転倒でバテ気味であった。しかし稜線に出ると展望が開け、びっしりとかいた汗を拭き、水を飲み一息ついた。

稜線上はヤジマナ沢側に雪庇が出ているが、一部に亀裂の入っている部分も見られたが、それほど危険な状態と言う訳ではない。我々より先行したパーティは、カヘヨノボッチの急斜面でスキーを担いで登って行ったが、後藤はトラバースルートを開拓して斜面を巻いて行く。後続パーティの多くもトラバースルートを通るが、急斜面で雪崩や滑落の危険もあり、雪の状態を考慮してルート選定する必要があるところである。

カヘヨノボッチから前岳・浅草山頂までは広くなだらかな斜面で、雪は硬く締まって快適な稜線歩きを満喫できた。山頂は風で雪が飛ばされているせいか積雪量は少なく、山頂名板や案内板は読み取れる。山頂で一時間ほど休憩し、近隣の鬼が面、守門、栗の山々や眼下の田子倉湖と三六〇度の越後の山なみ展望を楽しみ、最後に記念写真を撮って下山開始する。

同じルートを下山するが、下りはやはりスキーが速くて快適である。しかし気温上昇のため、一〇〇〇m付近から下の樹林帯では雪が重く、スキー制動に四苦八苦する。最後の林道のコースは快適な滑走で、ツボ足組よりかなり早く下山した。一四…〇〇には全員無事に出発地の大自然館駐車場に到着した。二十一座登山のスタートとして、全員登頂と安全登山の目的を達成し終了解散した。

第三十二回全国支部懇談会を取り組んで

小山 一夫

懇談会の様子は桐生副支部長が本部会報の「山」に掲載していますので約一年六ヶ月の準備活動を報告したいと思います。思いもよらぬ事故で親睦登山を実施出来ず残念でしたが、それなりの成果をえることが出来たと思います。

二年前に本部より全国支部懇談会の開催の打診があり、役員で討議し、支部総会で開催の承認をいただき準備活動に入りまし。役員会で討議し、開催地域を弥彦山塊に決めました。理由は日本山岳会の平均年齢は六十九歳です。日本百名山等の山域で開催すると限られた会員しか参加できず、観光からハードの山行まで実施できる弥彦山塊に決めました。

交流会は弥彦地域で収容人数最大の岩室温泉に決め、実行委員会体制の準備に入りました。越後は南北に長く全役員を一同に集めることが難しく新潟地域と県央地域を中心に実行委員会体制を確立し、各地域に責任者を決め、地域のまとめをお願いし、事務局と各担当責任者を中心に企画・組織の準備入り、「鮮やかな早春の越後の山へ」と全国に発信し、全支部より百五十名以上、越後支部より五十名以上の目標に取り組みましたが、春の弥彦山塊は全国的にも「花の山」で有名になり、多くの参加希望者が有りました。三十三支部中、二十八支部北海道支部から宮崎支部まで二百名以上、越後支部も七十名以上参加希望が有り、支部

懇談会最大の規模で開催することになりました。交通の便の良さと親睦登山の魅力が大きな要因だと思います。

二月に拡大役員会を開催し、支部が一つになって全国支部懇談会の成功を確認し、当日を迎えました。最後まで参加者が確定せず皆様に迷惑をお掛けしましたことはお詫びします。又突然の事故で最後まで日程を消化できず残念でしたが一つの目標に向かって支部がまとまったと思います。一人一人の得意分野で協力をいただき、事務局の協力要請に多くの支部会員から参加していただき感謝しています。

「何もしなかった支部が何かやれる支部に変身したと思います。」

親睦登山は中止しましたが、多くの参加者は弥彦山塊入り、青空のもとに弥彦山塊の山野草を楽しみ、三条新聞に八枚沢コースを登った感想が掲載され、秋田支部の佐々木長秀氏は「急登の連続だったが我慢できる範囲内。いろいろな里山、高山の植物が連続して出てくる魅力的なコースだった。特にカタクリの群生には圧倒されました。」又小林政志会長が「すぐく花の豊富な山だった。特にカタクリは群生だらけで上の方に行くに連れてありがたさが薄れるほどだった。奥多摩の山なら、髪の毛一本くらいの花だが、ここはフサフサしている。以外と時間もかからず、ユキワリソウもあり、お勧めしたいコースだ。これだけのことで準備してくれてありがたい」と弥彦山塊の感想を寄せていただきました。他にも裏参道コースや他コースで山野草を楽しんで弥彦山塊の花の多さに感嘆の声があがっていました。事故で親睦登山を中止したのに

もかわらず本部役員を含め、全国支部より支部に多く励ましと激励をいただきました。感激しています。

最後に事務局長として、いたらぬ私を支え、励ましとご協力をいただいた、多くの支部会員に感謝します、本当にありがとうございました。

一 山 域

高橋 正英

一 山 域…二王子岳

二 山行日…平成二十八年四月二十四日

三 参加者…支部会員、田邊信行、佐久間雅義、遠藤俊一、石山政雄、斎藤宣雄、高橋正英

オープン参加 下越山岳会員 四名

四 コースタイム

二王子神社6…50→一王子7…50→定高山8…50→油コボシ9…50→山頂10…40→山頂発11…40→神社下山14…20現地解散

五 行動概要

この時期例年であれば神社までのアプローチは残雪で覆われているのですが、今年是小雪で約一ヶ月くらい早く四月中旬に市の除雪が入り、車で神社まで入ることができました。参加の申し込みが無くどうなることかと思ひ、私の所属する会員に声をかけて四名オープン参加してもらいました。幸いに石山さん、遠藤さんの参加が有りホッとしました。七〇〇集合出発の予定でしたが、現地直行の遠藤さん、石山さんが新発田組より先に神社で待つており予定

の十分前に出発する。一王子まではすっきり雪が消えており、好天のもと、心地よい小鳥のさえずりを聞きながら快適に登る。登山者も沢山おり賑わっていました。一王子からは雪が出てきて雪と土のミックス状態であった。定高山で小休止して、次は油コボシで休むことにしてSL佐久間君の指示でここからは各自の判断でアイゼンをつける。気温が高いので雪は緩んでおり、油コボシの壁も踏み跡がしっかりとついていてなんの問題もなく登ることができました。

山頂には一〇…四〇に到着です。快晴にもかかわらず、飯豊連峰は中国の黄砂なのか春霞なのか、うすばんやりとかすんでいました。山頂は雪が無く、大勢の登山者でにぎわっており、私たちはとにかく記念写真というか証拠写真を撮り、堂沢側の雪渓で昼食をとり、一一…四〇下山を開始しました。最後、神社裏の杉林で、帰り土産の赤コゴミを取る人もいて、和気あいあいの楽しい記念山行となりました。まずは皆様のご協力により二番目の二十一座記念山行を終えることができました。参加くださった皆さま、大変お世話になり有難うございました。

マナスルとアンナプルナ

節田 重節

一本の映画と一冊の本が、私を「山」に結び付けた太いザイルである、と言っても過言ではない。

今から六十年前の昭和三十一年（一九五六）

年五月九日、日本山岳会第三次登山隊が三度目の正直でマナスル（八一六三m、当時は八一二五m）の初登頂に成功している。一本の映画とは、『マナスルに立つ』（一九五六年九月公開、演出：山本嘉次郎、企画：毎日新聞社、撮影：依田孝喜、配給：映配）である。そして、マナスルから遡ること六年、人類初の八〇〇〇m峰としてアンナプルナI峰（八〇九一m、当時は八〇七八m）がフランス隊の手に陥ちた。隊長モリス・エルゾグの生々しい手記が、もう一冊の本『處女峰アンナプルナ』（昭和二十八（一九五三）年、白水社刊）である。

*

海に囲まれた佐渡島で生まれ育った私が、映画『マナスルに立つ』を見たのは中学二年のときだった。広い体育館に暗幕を張って上映されたその映画は、高い山を、ヒマラヤを知らない少年に鮮烈なインパクトを与えた。ネパールという国があること、八〇〇〇mを超えるヒマラヤという山脈があること、そして、ヒマラヤ登山という面白そうな遊びのあること、など。当然、初登頂シーンがクライマックスだったと思うのだが、なぜか心に残っているのは、豪快なスケールのブリ・ガンダキ峡谷と、そこを行く長大なキヤラバンの隊列だった。山頂へと至る過程に、より一層ドラマを感じたのかもしれない。

いつか自分もあの大峡谷を歩いて、白き神々の座にアプローチしてみたい。そこにはどんな世界が待っているのだろうか……。すでにボロボロになっている世界地図を広げながら、まだ見ぬ遙かなヒマラ

ヤに想いを馳せていった。

中学校を卒業すると島内の高校は選ばず、新潟明訓高校に進んだ。姉が嫁いで新津にいたことと、大学受験に備えてというのが理由だった。ところが、高校二年のとき、またもや運命的な出会いがあった。映画『マナスルに立つ』を見たきりで、登山やヒマラヤに関してほとんど知識のなかった高校生が、なぜか書店の本の山の中から『處女峰アンナプルナ』という翻訳本を選び出したのである。

古町十字路にあった「北光社」という老舗書店（創業百二十年の二〇一〇年に廃業したということ聞いた。大切な思い出がまた一つ消えてしまった）の二階、確かフランス文学か何かの棚からだったと思う。

この山の名著を、高校生の私がどういうきっかけで選び出し、読んでみる気になったのか、いまだに自分自身、はっきりと理由を思い出せないでいる。

しかし、とにかく夏休みだか冬休みだかの前に買って帰り、夢中になってひと息に読み終えてしまったのを覚えている。そして、休みが終わって登校するやいなや、その本を見つけたことをいささか自慢するようになり、自分よりはるかに山の知識のある同級生に貸してあげたのだった。

やはり一気に読み終えた彼も、同じように幾分興奮さみに「あの手袋を落とした場面なんか、すごかったねえ」と言いながら、本を返してきた。（手袋を落とした場面）とは、アンナプルナI峰の頂上に立ったエルゾグとラシユナルが、人類初の八〇〇〇m峰登頂という感激を充分に味わう間もなく、追い立てられるようにして頂

上を後にした直後のアクシデントを指すこととは、私にもすぐに分かった。

「あっ、手袋！」

からだをかかめるだけの余裕もなく、手袋が手もとからすべり、さっと落ちてゆく！

……斜面をまっすぐに見えなくなつてゆく……：……はくは果然として立つたまま、止まろうともせずにすべり落ちてゆくのをみつめていただけだ。この手袋の動きは、手のどこしよのない、なにかしら取り返しのつかない決定的なものとして、多くの目に刻みこまれる。どうすることもできない！ この結果はたいへんなことになるだろう。どうすればいいのか？

エルゾグが自ら予言したとおり、アンナプルナの栄光の代償として、彼は手足の指のほとんどを凍傷で失うのである。山をやっていた同級生の彼には、一般の読者なら読み飛ばしてしまいたいような小さな事件が、強烈な印象となって残ったのであろう。

*

『處女峰アンナプルナ』を手にして以降、私は次々と山の本や雑誌を買い込んで来ては、受験勉強そっちのけで片っ端から読み始めた。もちろん、その中に月刊誌『山と溪谷』があったことは言うまでもない。さらにその熱病は重篤になり、明治大学入学と同時に山岳部入部という形になって慢性化していった。

個人山行を含めると年間約百二十日、つまり年の三分の一は山潰けだったというところで、学業の方は推して知るべし。法学部のはずが「山岳部卒」で、卒業後は縁あつ

て出版社で働くことになった。しかも山と溪谷社という、山の専門出版社である。入社五年後、幸運なことに、かつて高校生のころ愛読していた『山と溪谷』編集部に配属となる。そしてある年、さらに思いがけない幸運が舞い込んできた。当時、シャモニ市長としてスキー観光のPRのため来日した、あのエルゾグに、自分自身がインタビュールできることになったのである。本の訳者・近藤等先生のご紹介で、自分の運命に大きな影響を与えてくれた、その人。と対面した。指のことを慮って、ためらいがちに差し出した私の手を、彼は両手で堂々と、しかも思わぬ力強さでしっかりと握ってくれた。ほとんど掌しか残っていない彼の手を握り返したとき、あの（手袋を落とした場面）の重みが、強烈な実感となって伝わってきた。

幸運はまだまだ続く。母校の山岳部が派遣するヒマルチュリ（七八九三m）登山のために、昭和五十一年（一九七六）年秋、その偵察隊の隊長を命じられる。ところが当時、『山と溪谷』誌の現役編集長である。

恐る恐る社長（創業者・川崎吉蔵氏）にお伺いを立てたところ、「本隊は無理だが、偵察隊（一ヶ月半）ならいい。行って来い」と快諾を得る。留守中の編集部員には申し訳ないが、思わず小躍りしたことであった。

ヒマルチュリは昭和三十四（一九五九）年、日本山岳会隊がその東尾根にルートを開拓しているが、その南側の谷、チュウリン・コーラに新ルートを探るのが我々の使命だった。ということは、アプローチはマナスルと同じブリ・ガンダキである。カカニの丘を車で越え、トリスル・バザールか

事務局連絡

ら山越えしてアルガート・バザールに至り、いよいよブリ・ガンダキのキャラバンをスタートさせる。『マナスルに立つ』を見て芽生えた夢が、約二十年ぶりに叶った瞬間だった。映画に登場する、マナスル隊員たちが「上高地」と名付けた河原もそのまま、モンsoon末期の谷は蒸し暑く、蛭の襲来にも遭ったが、私の心は満たされていた。

*

映画の一部は追体験できたが、本のそれはまだ果たしていなかった。アンナプルナやダウラギリを展望する、ゴラバニ峠へのトレッキングは過去に歩いてしたが、かねてから気になっていたのは、エルゾグたちがベースとした、カリ・ガンダキ沿いのツクチェ集落である。思い立って三年前、ポカラから小型機でジヨムソンに飛び、カリ・ガンダキ沿いに南下、念願のツクチェを訪れた。

右岸には、エルゾグたちがルートを探ったダウラギリI峰（八一六七m、当時は一八一七m）とその東水河が見上げられ、左岸を分け入るとニルギリ連峰の奥にアンナプルナI峰が遠望できた。『處女峰アンナプルナ』の初版本を手にして歩くトレッキングは、高校時代以来の追体験となり、実に味わい深い山旅だった。

山歩きを始めて五十余年。様々な幸運や人々との縁に恵まれ、事故にも遭わず、真に幸せな「山人生」だった。その「運」に感謝し、「縁」を大切にしながら、身体が続くまで山道を歩き続けたいと願っている。

(会友)

平成二十八年年度越後支部総会が開催されました。

五月二十八日、上越市吉川区「スカイピア遊ランド」において出席者四十七名（委任状百七十二名）で開催。審議事項はすべて承認されました。すでに新年度の活動に入っていますが、越後支部創立七〇周年事業、「山の日」制定記念事業、公募登山などの活動を通じて、支部活性化を図り会員拡大につなげていきたいと思ひます。

日本山岳会越後支部創立七〇周年事業

日本三〇〇名山「越後支部担当二十一座踏破」多くの会員の参加を!!

これまでに浅草岳、二王子岳、金北山、守門岳、米山、粟ヶ岳（六月十四日現在）の六座は、いずれも天候に恵まれ登頂を果たしました。焼山は、残念ながら火山活動のため中止とします。また、中ノ岳は九月二十五～二十六日に日程変更となります。

「越後衆の、鈍と根」会員一人一座参加して祝杯を!!」をスローガンに、多くの会員参加で、完登に向け引き続き取り組みたいと思ひます。積極的な参加をお願いします。

「山の日」制定記念事業（第五十九回高頭祭と第六十三回新潟県登山祭）に参加ください。

では七月二十五日の「高頭祭」を「山の日」制定記念事業として取り組むことになりました。「高頭祭」の記念講演は「山の日制定までの経緯と各支部における取り組み」（講師 成川隆顕氏）。登山祭では「山の日記念行事の全国的盛り上げについて」（講師 磯野剛太氏）を予定しています。多くの会員の参加を、お願いします。詳しくは、配布済みのチラシをご覧ください。

新入会員の勧誘にご協力願ひます。

越後支部では、新入会員勧誘の強化に取り組んでおります。会員増加に支部会員の皆様のご協力をお願いします。

支部事務局へ問い合わせただければ「パンフレット」及び「入会申込書」を送付します。是非、お声かけ下さい。なお、「入会申込書」は日本山岳会ホームページからもプリントできます。

支部会員動向

一 物故会員

- 茨城 弘（五〇一七）長岡市 二〇一六年二月逝去

二 退会者

- 佐藤 晴夫（四五三四）見附市 二〇一五年十二月
- 早川 英夫（八二七三）燕市 二〇一六年二月
- 田中 純夫（九〇九二）新潟市中央区 二〇一六年四月

- 三留 仁（五二八二）阿賀町 二〇一六年五月

- 込山 孝（八三五八）新潟市西蒲区 二〇一六年五月

三 新入会員

- 渡辺 茂（二五八九八）新潟市西区 二〇一六年一月
- 高波 菊男（一五九〇三）湯沢町 二〇一六年一月

四 支部会員総数

（二〇一六年五月二十八日現在） 二〇一名

中ノ岳登山日時変更

九月十八～十九日予定の中ノ岳ですが、日程を一週間後の九月二十五日（日）～二十六日（月）に変更願ひします。

私事で日程の都合がつかなくなり、CLの和田守さんと協議の結果、避難小屋の混雑も避ける事が可能と予測できるため、変更としました。

編集後記

全国支部懇談会や支部七十周年記念登山、節田氏の長文など記事に事欠かない十六号だが、少しメリハリに欠けた。今年、山岳写真展出品作品を募集しています、参加希望者は事務局、本間まで連絡願ひます、八月末まで。